

『隋書』經籍志集部後序の宮體詩觀

中筋, 健吉
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9712>

出版情報：中国文学論集. 18, pp.52-77, 1989-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『隋書』經籍志集部後序の宮體詩觀

中 筋 健 吉

一

唐朝第二代皇帝太宗李世民的治世にいたって、中國はようやく梁末以來約七十年間にわたる混亂狀況から脱し、貞觀の治とよばれる太平の世をむかえることになる。

この時期を文學の面からみると、六朝末期の文風をなお色濃くひきずる傾向と、それに反發して、あらたなる潮流をおこそうとする動きが混在する様相を呈していた。そして、このことと關連して、隋末から初唐にかけて、おもに史書を中心として、それまでの文學に對する評論も盛んにおこなわれている。

ところで、それら多くの評論のなかでも、特に批判の對象とされていたのが、梁末以後の文學である。

この時代の文學といえば、當然梁・簡文帝蕭綱の立太子を契機として國內を席卷するにいたった宮體詩をさす。

そしてこの詩のスタイルは、従来『玉臺新詠』をその代表とする「綺羅脂粉」の艶詩と認識されてきた。この問題について論者はかつて別稿において考察を試み、その中で

- ① 宮體詩の流行にもかかわらず、この書の存在が撰者徐陵の本傳中に記載されていないこと。
- ② 主な宮體詩人の現存詩中にしめる艶詩の割合が、『玉臺新詠』所收のものを除けば、決して多くはないこと。
- ③ 宮體派文人と同時代人による評價が、彼等の文學が聲韻と修辭を重視する美文であることをしめていること。

等から、宮體詩が巷間にいうところの「艶詩」ではなく、『梁書』庾肩吾傳に指摘するように、「聲韻」を重視し、その「麗靡なるを尙」ぶ詩體を⁽¹⁾いうのではないかとの結論を出すに⁽²⁾いたった。

ところが、前述の文學評論のなかに、この宮體詩について、唯一それが男女の事柄を主題とするものであると明言する資料が存在する。それが本稿で取り上げようとする、『隋書』經籍志集部後序である。

周知の通り、『隋書』經籍志集部後序は、古代から隋にいたる歷代文學の評論を簡潔にこころみた文學史であり、その形式は梁・沈約の『宋書』謝靈運傳論を踏襲している。このなかで、六朝末期、特に梁末以後の文學について次のように言及している。

梁の簡文の東宮に在るや、亦篇什を好む。清辭巧製は、枉席の間に止まり、雕琢蔓藻も、思は閨闈の内を極む。後生の好事、^{たが}通相ひに放習し、朝野紛紛として、號して宮體と爲す。

ここにいう「枉席」とは、しとね、寢室のことであり、「閨闈」は婦人の居室、すなわち女性をさす。つまり、こ

の後序は宮體詩が艶詩であるとの認識に立っているのである。

しかしながら、いまあらためて梁末以後の文學狀況をみると、後にも述べるように、當時簡文帝の果たした役割は、この後序に述べているほど大きなものではなかったことがわかる。そしてまた、その他の文學評論による齊梁以後の文學に對する批判を検討してみても、その方向は明らかにここに擧げたものと内容を異にしており、後序のこの部分は決してそのまま受け入れることができないのである。

そこで小稿では、前稿を補足する意味で、まず梁末以後の文學狀況を考え、さらに初唐期の各文學評論および後序それ自身を検討することによって、この内容の當否を見てゆきたい。そして最後に、後序がかかる認識を示すにいたった狀況についても少しく言及してみたい。

二

本論にはいる前に、宮體詩について若干の説明をしておこう。

宮體詩の創始者は、蕭綱幼少のおりから、ながらくその隨府府佐の任にあつた東海の徐摛である。『梁書』徐摛傳に次のようにいう。

王（蕭綱）入りて皇太子と爲り、家令に轉じて、兼ねて管記を掌り、尋いで領直を帶ぶ。摛は文體既に別し、春坊盡く之を學び、「宮體」の號、斯自り起く。

昭明太子蕭統薨去の後をうけて蕭綱が皇太子になったのは、中大通三年（五三二）七月のことである。その太子

にしたがって東宮職についた徐摛は、春坊内に新しい詩體をもたらし、それが流行したために「宮體」と呼ばれることになった。

彼の文學が、本傳の最初に「文を屬るに好んで新變を爲り、舊體に拘らず」というように、南齊の永明時代に流行し、「新變」と評された永明體の系譜を引くものであったことはほぼ確實である。

さて、徐摛はその年のうちに新安太守として赴任し、任期満ちて京師に歸還し、再び東宮に入る。そして、同じく蕭綱の隨府佐で一時湘東王のもとにいた庾肩吾が太子率更令、中庶子として、また彼等の息子である徐陵、庾信が東宮學士に充選され、四人が一堂に會するにおよんで、この詩體は京師に爆發的なひろがりを見せるにいたる。『周書』庾信傳には次のようにいう。

時に肩吾は梁の太子中庶子と爲り、管記を掌る。東海の徐摛は左衛率と爲る。摛の子の陵及び信は、竝びに抄撰學士と爲る。父子東宮に在りて、禁闈に出入し、恩禮與に隆んなるを比ぶる莫し。既に盛才有り、文竝びに綺艷。故に世は號して「徐庾體」と爲せり。當時の後進、競相ひて模範とす。一文有る毎に、京都傳誦せざるは莫し。

この記事にいう「徐庾體」は、前掲の徐陵傳の記述からかんがえて宮體と同じものをさすと考えられるが、ともかくも彼等の文學は『南史』梁本紀下論に「宮體の傳ふる所、且に朝野を變ぜんとす」というほどの流行ぶりであったし、そのことは『梁書』庾肩吾傳の記述によっても確認できる。⁽¹⁾

なお『梁書』簡文帝紀には、

『隋書』經籍志集部後序の宮體詩觀（中筋）

太宗（蕭綱）……雅はなはだ好んで詩を題し、其の序に云はく、「余七歳にして詩癖有り、長じて倦まず」と。然るに輕艶に傷み、當時號して曰はく、「宮體」と。

とあり、一見すると蕭綱の詩體のみが宮體詩と呼ばれたかのような印象を與える。しかしこれは、物事の敘述においてその傳の主人公を中心とする紀傳體の性質のしからしむるところであり、實際には徐摛傳が示すとおり、徐摛がその創始者で、徐庾父子が此體をリードする存在だったことは明らかである。

三

それでは、後序の宮體詩に關する記述についての検討をおこなうことにしよう。

まず、この部分で批判の對象として名指しされているのが、なぜか簡文帝蕭綱一人だけである。ところが前章にもみたように、宮體詩の京師での流行は、決して蕭綱ひとりによるものではなく、徐庾父子に負う部分が多かったことは否定できないのである。これが後序に對する疑問の一つである。

さらに、魏徵による『隋書』文學傳序では、梁末以後の文學狀況をつぎのようにいう。

梁は大同自り後、雅道淪缺し、漸ややく典則に乖き、争ひて新巧に馳す。簡文・湘東（湘東王蕭繹）、其の淫放を啓き、徐陵・庾信、路を分かちて鑣を揚ぐ。其の意は淺にして繁、其の文は匿かくにして彩なり。詞は輕險を向び、情に哀思多し。格すに延陵の聽を以てすれば、蓋し亦亡國の音なるか。周氏の梁・荆（陳）を吞併するや、此の風關右に扇り、狂簡斐然として俗を成し、流宕して反るを忘れ、裁を取る所無し。

すなわち、ここでは梁の大同以後（五三五）、蕭綱・蕭繹を嚆矢とする、正統を外れて「新巧」にはしつた彼等の文學、すなわち宮體が、梁朝の滅亡にもなつて徐陵・庾信が南北に岐路を異にすることによつて、それぞれの地方に傳播されたことをのべている。⁽³⁾

しかしながら、次に擧げるように、後序は梁滅亡以後についても徐庾の存在にはまったく觸れていないのである。

陳氏は之に因りて、未だ全變する能はず。其れ中原は則ち兵亂積年にして、文章の道盡く。……後周は草創、干戈戢めず、君臣力を戮^{あは}せて、専ら經營を事とす。風流文雅は、我則ち未だ暇あらず。

梁末以後、この二人の文學があたえた影響にはまことに絶大なものがある。

たとえば庾信についてみてみよう。承聖二年（五五三）七月、彼は元帝（湘東王）政權の國使として西魏に赴く。その前年に王僧辯によつて平らげられた侯景によつて、すでに梁朝の弱體化は覆うべくもなかった。庾信の北行は、南方を虎視眈眈と伺う軍事國家との、いわば未來なき外交交渉のためのものであったが、その年の十一月、西魏は軍を江陵に進め、さらに十二月に元帝が殺されたため、彼はそのまま長安に抑留されてしまう。以後彼は西魏、北周に仕え、梁の滅亡にもなつてあまたの貴族達に混じつて拉致されてきた琅琊の王褒とともに高い爵秩を受け、北周の外戚楊堅が靜帝に替つて帝位についた隋の開皇元年（五八一）に六十八歳の生涯を終える。

『周書』王褒庾信傳論は、この北方の異土で、庾信が絢爛このうえない六朝文學の體現者としていかに厚遇され、王褒とともにその文學がいかにもてはやされたかを傳えている。

唯だ王褒・庾信のみ奇才秀出し、一代を牢籠す。是の時、世宗は雅詞雲委し、滕・趙の二王は、雕章閒發す。

咸く宮を築きて館を虚しくし、布衣の交わりの如き有り。是に由つて朝廷の人、閭閻の士、味を遺韻に忘れ、

精を末光ひともに眩まさざるは莫し。猶ほ丘陵の嵩・岱を仰ぎ、川流の溟渤あつに宗あつまるがごときなり。

滕・趙とは滕王道、趙王招をいう。二王とも、庾信にとつて物心兩面にわたる後盾であり、かつその文學のよき理解者であつた。とくに趙王招は、『周書』趙王招傳にみえるように「幼くして聰穎、博く羣書に涉り、文を屬るを好む。庾信の體を學び、詞に輕艶多し」というように、庾信への傾倒ぶりにはなみなみならぬものがあつた。

さて、彼の死後もその影響は容易に衰えることはなかつた。たとえば、『隋書』魏澹傳には、廢太子楊勇が澹に命じて『庾信集』に注させた(4)とあるし、また同じく柳瞽傳中には、當時晉王であつた煬帝が、柳瞽に會して文體を一變させる以前に、當初は「庾信の體」で文をつづつていたと述べている。(5)

そして唐代には、太宗が「秋日 庾信の體を數まねぶ」と題する五言十句詩を作っているし、漢魏の風骨を唱えて晉宋以下齊梁にいたるまでを批判した陳子昂でさえも、やはり庾信の詩體をイメージしたと思われる五言八句「上元夜 小庾の體に效ふ」をものしているのである。

一方、西魏による長安への連行を免れた數少ない貴顯の一人である徐陵も、當然のことながら陳朝では重要な存在であつた。その官位は最終的に左光祿大夫・太子少傅にまで登りつめるが、國家の滅亡を目にすることなく、後主の至徳元年（五八三）に七十七歳で卒している。『陳書』徐陵傳にいう。

有陳の創業自り、文檄軍書及び禪授の詔策は、皆陵の製る所にして「九錫」尤も美なり。一代の文宗たりて、

亦此を以て物に矜らず、未だ嘗て作者を詆訶せず。其の後進の徒に於けるや、接引して倦むこと無し。世祖、高宗の世、國家に大手筆有るは、皆陵之を草す。

もつて、その陳朝文壇に於ける重鎮ぶりがわかる。ちなみに、唐・太宗の弘學館學士として、また書家としても有名なかの虞世南も、ここにいう「後進」の一人であり、常に徐陵の文章を祖述し、かつて彼から「己の意を得」と評された人物である。⁽⁶⁾

さらに『陳書』は次のように彼の文學についてコメントする。

其の文頗る舊體を變じ、緝裁巧密にして、多く新意有り。一文の手を出づる毎に、好事者已に傳寫成誦し、遂に之を華夷に被^おほし、家々に其の本を藏す。

この記述からも明らかなように、新機軸をうちだして舊來の文體を脱却した徐陵の文學は、まことに梁陳を通じて衆人の宗とするところであつたのみならず、その威光は北朝にまでおよんだのである。

以上に見てきたように、庾信・徐陵が梁末以後に與えた影響の大きさは、決して看過することのできないものであり、それはとうてい蕭綱などのおよぶところではなかつたのである。したがって、この二人についてなんらの言及もなく、梁末以後の文學の責任を一人蕭綱のみに歸着させているこの後序の認識は、きわめて妥當性を缺くものと言えるのではないだろうか。

四

それでは、隋から初唐にかけて行なわれた各種文學評論では、この時代の文學をどのように見ているのであろうか。本章では、これらの文學評論の主立ったものを取り上げ、歴代の文學に對する評價を閲し、特に六朝末期の部に注目して、後序との相違點を明確にしてみたい。

(a)

まず、次に掲げる『隋書』李諤傳中の文は、文章の才能、とりわけ美文によって人士を採用するという南朝以來の官吏登用法が、隋初においてもなお引き續き行なわれている状況の中で、李諤がその風潮を憂慮し、ために文帝に上書したものである。

臣聞く、古先の哲王の民を化するや、必ず其の視聽を變じ、其の嗜好を防ぎ、其の邪放の心を塞ぎ、示すに淳和の路を以てす。五教六行は訓民の本爲り、『詩』『書』『禮』『易』は道義の門爲り。故に能く家孝慈を復し、人禮讓を知り、正俗風を調ふるは、此れより大なるは莫し。其れ書を上り賦を獻じ、誅を制り銘を鐫る有るは、皆以て徳を褒め賢を序し、勳を明らかにし理を證すればなり。苟も懲勸するに非ざれば、義は徒然ならず。

降りて後代に及びて、風教漸く落つ。魏の三祖は、更に文詞を尙び、君人の大道を忽せにし、雕蟲の小藝を好む。下の上に從ふは、影響に同じき有り。競ひて文章を騁べ、遂に風俗を成す。江左の齊梁は、其の弊彌よ甚だし。貴賤賢愚、唯だ吟詠に務む。遂に復た理を遺れ異を存し、虚を尋ね微を逐ふ。一韻の奇を競ひ、一字の

巧を争ふ。篇を連ね牘を累ぬるに、月露の形を出でず、案に積み箱に盈つるは、唯だ是れ風雲の状なるのみ。世俗は此を以て相高しとし、朝廷は伎に據りて士を擢ぶ。祿利の路既に開かれ、愛尙の情愈よ篤し。是に於いて閭里の童昏、貴遊の總卯、未だ六甲を窺はず、先づ五言を製る。

前段部分、および後段中の「君人の大道を忽せにし、雕蟲の小藝を好む」という言葉から、李諤が強硬な儒教主義的文學觀に立っていることは明らかである。

後段以下、魏の三祖から「文華」に傾斜してゆく状況への批判が述べられているが、齊梁については「一韻の奇を競ひ、一字の巧を争ふ」、「月露の形を出でず」、「唯だ是れ風雲の状なるのみ」と決めつけ、自然描寫のみに偏ったありかたを非難している。このあとの部分で隋の状況に言及していることから、李諤のこの認識は梁末についても同様であったと見てよいであろう。

(b)

次に、唐・太宗の祕書監として活躍し、また令狐德棻とともに前代史の編纂にあたっても重要な役割をはたした魏徴の文學論をみてみよう。彼の文學論は、第三章において一部引用した『隋書』文學傳序に表明されている。

彼は、「漢魏自り以來、晉宋に迄びて、其の體屢は變するは、前哲之を論すること詳らかなり」と、漢から劉宋までを大幅に省略した後で、齊梁に關して次のように述べている。

永明・天監の際、太和・天保の間に暨んで、洛陽・江左は、文雅尤も盛んなり。時において作者、濟陽の江淹

『隋書』經籍志集部後序の宮體詩觀（中筋）

・吳郡の沈約・樂安の任昉・濟陰の溫子昇・河間の邢子才・鉅鹿の魏伯起等、並びに學は書圃を窮め、思は人文に極まる。縉綵は雲霞よりも鬱として、逸響は金石よりも振るふ。英華秀發して、波瀾浩蕩たり。筆に餘力有り、詞に源を竭くす無し。諸を張・蔡・曹・王に方くらぶれば、亦各一時の選なり。其の風を聞く者は、聲に馳せ景を慕ふ。

ここでは、南齊の末期から梁初にかけて永明體の旗手として文壇をリードしていた沈約、そして名文家として聲望高かった任昉を、北朝では三才子として有名な北魏の溫子昇、北齊の邢邵・魏收をそれぞれあげて、彼等の文學を後漢の張衡・蔡邕、魏の曹植・王粲を引き合いにだして絶賛している。「縉綵は雲霞よりも鬱として、逸響は金石よりも振るふ。英華秀發して、波瀾浩蕩たり」との評語から、彼等のそれが修辭主義的美文を指すことは明らかであるが、この評價は、さきにもた李諤の齊梁を否定する文學觀とは百八十度異なるものといえよう。

文學傳序は、次に南北朝それぞれの文學の特質を論じる。

然るに彼此好尚は、互ひに異同有り。江左は宮商發越し、清綺を貴ぶ。河朔は詞義貞剛にして、氣質を重んず。氣質なれば則ち理其の詞に勝り、清綺なれば則ち文其の意に過ぐ。理深き者は時用に便にして、文華やかなる者は詠歌に宜し。此南北詞人の得失の大較なり。若し能く彼の清音を掇り、茲の累句を簡にし、各の短とする所を去り、其の兩長を合すれば、則ち文質斌斌として、善を盡くし美を盡くす。

すなわち、南朝文學は聲韻と清綺なる表現をたつとび、北朝文學は内容の正しさと風骨を重視することである。そして魏徵は、兩者の短所を取り去り、長所を合わせることによって、文飾と内容のほどよく調和のとれた

「文質斌斌」たる文學が完成すると斷じているのである。

ところが、續く部分で、彼は一轉して梁末以後の文學を嚴しく指彈する。第三章において既に引用した箇所である。

彼はここで、簡文帝・湘東王・徐陵・庾信に代表される梁の大同以降の文學を「雅道淪缺し、漸く典則に乖き、争ひて新巧に馳す」と批判し、「其の意は淺にして繁、其の文は匿にして彩。詞は輕險を尙び、情に哀思多し」と具體的にその缺點を指摘している。要するにこの部分は宮體派に對する、「文質斌斌」という「典則」から乖離して「質」を無視した「文」重視の、言い換えれば修辭一邊倒の文學のありかたへの非難だといえよう。魏徵はこの序文の冒頭で、

『易』に曰はく「天文を觀て、以て時變を察し、人文を觀て、以て天下を化成す」と。『傳』に曰はく「言は身の文なり。言にして文ならざれば、之を行なふも遠からず」と。

と、『易』の「賁」卦の象傳と『左傳』襄公二十五年の一節をふまえていう。つまり、彼が文章美の必要性を認めるのは、あくまでも文學の教化性を前提とした上でのことなのであり、したがってテクニクに墮した梁末以後の文學を批判するのは、當然のことなのである。だとすれば、魏徵もまた儒教的文學觀に立っていることが明白であると言えよう。ちなみに、このことは彼の「羣書治要序」においても確認できる。⁽⁷⁾

(c)

『隋書』經籍志集部後序の宮體詩觀（中筋）

次に時代はやや下るが、高宗期に活躍し、六朝末期の文學を批判的に繼承したといわれる四傑の文學論はいかがであるか。⁽⁸⁾

まず隋末の文中子王通の孫にあたる王勃についてみてみよう。「吏部裴侍郎たてまつに上の啓」には次のようにいう。

夫れ文章の道は、古自り難しと稱せらる。聖人は開物を以て務めと成し、君子は立言を以て志を見はす。雅を遺れ訓に背くは、孟子爲さず。百を勧め一を諷するは、揚雄の恥づる所なり。苟も大義を甄明し、末流を矯正し、俗化資するに興衰をもつてし、國家其の輕重に由るべきものに非ざれば、古人未だ嘗て心を留めざるなり。

ここから明らかなように、王勃のそれも儒教的文學觀であるということができる。さらに彼は續けていう。

微言既に絶えて自り、斯文振るはず。屈・宋源を前に澆ぎ、枚・馬淫風を後に張る。人主を談ずる者は、宮室苑囿を以て雄と爲し、名流を絞する者は驕奢に沈酗するを以て達と爲す。故に魏文は之を用いて中國衰へ、宋武は之を貴びて江東亂る。沈・謝争ひて驚すと雖も、適に齊・梁の危を兆すに足り、徐・庾竝び馳すも、周・陳の禍を止むる能はず。

すなわち、先秦の屈原・宋玉以下、魏の文帝、劉宋の武帝、齊梁の代表的文人である沈約・謝朓等を擧げ、北周・陳からはそれぞれ庾信・徐陵を名指しし、ひとしなみに否定している。

(d)

楊炯は、屈原・宋玉は認めながらもそれ以後の文學については全て批判している。「王子安(勃)集序」にいう。

仲尼既に没して、(子)游・(子)夏洙泗の風を光かせ、屈平自沈して、唐(勒)・宋(玉)汨羅の跡を弘む。文儒焉に於いて術を異にするは、詞賦の源を殊にする所以なり。秦氏の書を燔くに逮びて、斯文天喪す。漢皇改運するも、此道還らず。賈(誼)・馬(司馬相如)蔚興するも、已に雅・頌に虧け、曹(植)・王(粲)傑起するも、更に風・騷を失ふ。大猶に俚俚するも、未だ前載を忝くせず。潘・陸奮發し、孫(綽)・許(詢)相因るに洎んで、之を繼ぐに顔(延之)・謝(靈運)を以てし、之を申ばすに江(淹)・鮑(照)を以てす。梁・(北)魏の羣材、周・隋の衆制、或いは苟(かりそめ)に蟲篆を求め、未だ力を丘墳に盡さず。或いは獨り波瀾(したなみ)に徇ひ、源を禮樂に尋ねず。

ここで楊炯は、漢の賈誼・司馬相如、魏の曹植・王粲、西晉の潘岳・陸機、東晉の孫綽・許詢、劉宋の顔延之・謝靈運・鮑照、梁の江淹と、名立たる文人をことごとく否定し、さらに、雕蟲技にはしる梁代以後、北魏、北周、隋を痛烈に批判する。

楊炯の文學論も、文人評價の面において王勃とはやや出入があるものの、儒教的文學觀であることにはまちがいない。

(e)

盧照鄰については、前二者とはいささか異なる文學史觀を呈している。彼は「南陽公集序」の中で、孔子以後に關して次のように肯定している。

『隋書』經籍志集部後序の宮體詩觀(中筋)

獲麟絶筆自り、一千三四百年、游・夏の門、時に荀卿・孟子有り。屈・宋の後、直だ賈誼・相如に至る。兩班事を敘して、丘明の風骨を得、二陸詩を裁して、公幹（劉楨）の奇偉を含む。鄴中の新體、共に音韻天成なるを許し、江左の諸人、威な瓌姿の艶發なるを好む。精博爽麗、顏延之は江・鮑の間に急病し、疎散風流、謝宣城は向・劉の上を緩歩す。北方は重濁、獨り盧黃門（盧思道）のみ往往にして高く飛び、南國は輕清、惟だ庾中丞のみ時時墜ちず。

彼は、先秦では子游・子夏、荀子・孟子、屈原・宋玉、漢では賈誼・司馬相如、班彪・班固父子、晉は陸機・陸雲兄弟、劉宋は顏延之、そして南齊では謝朓を擧げ評價している。なお、文末の盧黃門とは隋の盧思道のことであるが、庾中丞は未詳である。ともかくも、ここで盧照鄰が先秦以下南朝にいたるまでの文學をほぼ認めていることが確認される。ただし、一方では、

八病爰に起り、沈隱侯永らく拘囚と作り、四聲未だ分かつたれず、梁の武帝は長らく輿俗と爲る。後生曉る莫く、更に文律の煩苛なるを恨み、音を知る者稀にして、常に詞林の交も喪はるるを恐る。雅頌作らずんば、則ち後に死する者は焉んぞ得て聞かんや。

と、沈約に始まる、齊梁以來の煩瑣な聲韻重視の文學に對しては、嚴しく批判を加えている。

この文から明らかなように、盧照鄰の文學論は、李諤、王勃、楊炯のように、強硬な儒教主義的立場に立っているのではなく、文學そのものに密着したものだと言える。

(f)

最後に、盧照鄰とほぼ同年代の駱賓王についてはどうであろうか。「和道士閨詩啓」に次のようにいう。

竊かに惟へらく、詩の興作するは、基を遂古に兆す。唐歌虞詠、始めて典謨に載せられ、商頌周雅、方めて金石に陳ねらる。其の後志を言ひ情に縁るは、一京に斯れ盛んなり。毫を含みて思ひを瀝ぐは、魏晉に彌よ繁し。布きて縑簡に在り、差や商略すべし。李都尉の鴛鴦の辭は、纏綿巧妙、班婕妤の霜雪の句は、發越清迥。

平子の桂林、理は文外に在り。伯喈の翠鳥、意は行閒に盡く。河朔の辭人は、王・劉を稱首と爲し、洛陽の才子は、潘左を先覺と爲す。乃ち子建の羣彦を牢籠し、士衡の當時に籍甚するが若きは、竝びに文苑の羽儀にして、詩人の龜鏡なり。爰に江左に速びて、謳謠して輟まず。神骨仙才有るに非ず、専ら玄風道意を事とす。顔・謝は特に挺んで、戕伐として典麗たり。茲自り以降、聲律稍く精やかにして、其の間沿改するも、能く本を正す莫し。

彼もまた、漢魏以後の詩についてはほぼ全面的に評價しながらも、六朝末期の、文人が煩苛な詩律に拘束されている状況には極めて批判的である。そして、ここから駱賓王の文學論も儒教的文學論を前提としてはおらず、純粹に文學面に立つてのものであることが看取できるのである。

以上、隋から初唐期にみられる文學評論をみてきたわけであるが、おおむね次のように分類されよう。まず、李諤・王勃・楊炯のように、儒教イデオロギーを前面にうちだして修辭主義的美文を排斥する考え方が一つである。

次に、儒教主義にもとづく文章教化説を前提とした上で、文章美を支持する魏徴のような考え方。これら二つの觀

點は、唐初における國家建設にあつたの儒教重視政策と密接な關係があると思われる。そして最後に、純粹に文學的側面から歴代の文學を評價する盧照鄰・駱賓王のような立場である。

この三者の觀點から宮體派文學の盛行した梁末以後をそれぞれみた場合、大義をゆるがせにし、風俗教化の役に立たぬもの、あるいは「文質」の平衡を缺き修辭に偏向するもの、煩瑣な聲韻に拘るもの、と言うことができよう。ところが、ここには後序で批判しているような男女云々の發言はなされていないし、ごく一部ながら否定的評價の對象として徐陵・庾信の名こそ出ているが、簡文帝に關わる言及は魏徵を除いて全くない。⁽¹⁰⁾そしてこの魏徵でさえ、梁末の「淫放」な文學の責任を決して彼一人に押し付けてはいないのである。このように見ると、後序の宮體詩批判は、各文學評論とはかなり異質なものと認識せざるを得ないのである。

五

それでは、宮體詩艶詩説となえる後序は、いかなる文學史觀を展開しているのであろうか。本章においては、後序をいくつかの内容にきぎってみてゆくことにしよう。

文は言を明らかにする所以なり。古は高きに登りて能く賦し、山川に能く祭り、師旅に能く誓い、喪紀に能く誄し、作器に能く銘すれば、則ち以て大夫爲るべし。其の物に因りて辭を聘べ、情靈の擁る無き者を言うなり。

まず、文章が言葉を明確にするためのものであるとし、さまざまな場面で、その状況に應じた文章を能くするものこそが大夫たり得るとしてこの序文は始まる。そして、その大夫を、對象にしたがって文章をつづり、心性をと

どこおることなく展開しうる者であるとも定義している。この部分は、『詩經』鄘風「定之方中」の毛傳の「故建邦能命龜、田能施命、作器能銘、使能造命、升高能賦、師旅能誓、山川能說、喪紀能誄、祭祀能語、君子能此九者、可謂有德音、可以爲大夫」をふまえる。ちなみに、初唐期に編纂された史書にみえるこのような文學評論の開頭には、程度の差はあれ、儒教イデオロギーに基づく文章の教化的效用がうちだされることが多い。たとえば、さきに見た『隋書』文學傳序がそうであるし、『北齊書』文學傳序や『晉書』文苑傳序、そして『南史』文學傳序などもそうである。⁽¹¹⁾

續いて後序は、以下太古の堯・舜および『詩經』から始めて歴代の代表的文人を取り上げ、それぞれ順をおってコメントしている。

唐歌虞詠、商頌周雅は、事を敍べ情に緣り、紛綸として相襲ふ。斯自り已降、其の道彌よ繁し。世に澆淳有り、時は治亂を移す。文體遷變し、或は邪正殊なる。宋玉・屈原は、清風を南楚に激はせ、嚴・鄒・枚・馬は、盛藻を西京に陳ぶ。平子は東都に覽發し、王粲は漳・滏に獨歩す。

爰に晉氏に逮んで、潘・陸と稱するを見、竝びに黼藻相輝き、宮商閒起す。清辭は金石を潤し、精義は雲天に薄る。永嘉已後、玄風既に扇り、辭に平淡多く、文に風力寡し。降りて江東に及んで、其の弊に勝へず。宋・齊の世より、下は梁初に逮んで、靈運高致の奇、延年錯綜の美、謝文暉の藻麗、沈休文の富溢、輝煥斌蔚として、辭義觀るべし。

ここで後序は、堯・舜・『詩經』以後文學の道が盛んになり、世の風俗の盛衰、時代の治亂によって、文體の變

『隋書』經籍志集部後序の宮體詩觀（中筋）

遷や文學の内容に正邪があると述べたあと、屈原・宋玉以降の文學を積極的に肯定し、前漢では嚴助・鄒陽・枚乘・司馬相如、後漢では張衡・王粲、西晉の潘岳・陸機、劉宋の謝靈運・顏延之、南齊の謝朓、梁初の沈約と、文學史上名立たる文人たちを列擧し、特に潘・陸以降については辭を盡くして稱贊している。

次の部分は、本論稿の第一章に掲げた宮體詩および陳朝批判であり、ここでは重複を避けて再録しない。ただ簡文帝が艶詩に傾倒していたことは確かで、時代はやや遡るが陳・何之元の「梁典總論」（『文苑英華』卷七五四）では、

太宗は孝慈仁愛にして、實に守文の君たり。惜しいかな、賊の殺す所と爲る。文章妖艶にして、風典を隳墜するに至りては、婦人の口に誦せられ、君子の聽の及ばず。斯れ乃ち文士の深病、政教の厚疵なり。然るに雕蟲の技は、治忽に關するに非ず。壯士は爲さず、人君焉くんぞ用いんや。

として、その艶詩制作ぶりを批判している。何之元は梁陳二朝に跨がる歴史家であり、この部分は同時代人による見聞として信賴するに足るものである。しかしながら、『隋書』文學傳序において、簡文帝とともに「淫放を啓いた人物として糾彈されていた湘東王蕭繹については、

世祖は聰明特達にして、才藝兼ねて美なり。詩筆の麗、與に匹を爲す罕し。

と稱贊している。このことからすれば、簡文帝が艶詩制作に執心であったのは彼の個人的な傾向だったと言え、決して宮體派の集團的なそれではなかったのである。

次に、北朝に關する記述に移ることにする。

其れ中原は則ち兵亂積年にして、文章の道盡く。後魏の文帝は、頗る辭を屬るを效ふも、未だ俗を變ふる能はず、例ね皆淳古たり。齊宅漳濱は、辭人閒起し、高言累句は、紛紜絡繹するも、清辭雅致は、是れ未だ聞かざる所なり。

「中原は文學の道が盡きてしまった」というように、北朝文學に對して、後序はほとんど高い評價を與えていないように思われる。さきに見た『隋書』文學傳序が、北朝の三才子を南朝側の大物文人である沈約・江淹と並べて擧げていただけに、「清辭雅致は、是れ未だ聞かざる所なり」という記述はいかにも冷淡に見える。

そして、かかる筆致は、第二章に引用したように、北朝文學について述べた箇所においても變わることなく、「北周は國家經營に專念していたために、風流事にはその暇がなかった」とにべもなく言い切っている。これまた、『隋書』文學傳序や『周書』王褒庾信傳論において、庾信によって梁末の文風が北周にもたらされて流行したことを嘆いているのとは、全く内容を異にしている。

最後に、隋代文學を述べたくだりについて見てみよう。

其の後南のかた漢・沔を平らげ、東のかた河朔を定め、有隋に訖んで、四海一統し、荆南の杞梓を采り、會稽の箭竹を收むるがごとく、辭人才士、總て京師に萃まる。屬ま高祖は文少なく、煬帝は忌むこと多きを以て、當路の執權、相擯壓するに速ぶ。是に於いて靈蛇の珠を握り、荆山の玉を韞し、溝壑の内に轉死する者、勝げて數ふべからず。草澤の怨刺、是に於いて興る。

隋朝では才能ある人士がいたにもかかわらず、文帝に文學の素養がなく、また煬帝も人を妬んで止まなかったが

ゆえに、権力者から彼等は排斥され、その結果數多くの文才ある者たちが苦境のなかで野垂れ死にしていまい、かくて怨嗟の聲があがるにいたつたことである。ちなみに、文學傳序ではこの二人の皇帝について、次のように述べている。

高祖初めて萬機を統べ、毎に斲雕を樸に爲さんことを念ひ、發號施令して、咸く浮華を去る。然れども時俗の詞藻、猶ほ淫麗多し。故に憲臺執法し、屢ば霜簡を飛ばす。煬帝初めて藝文を習ふに、輕側を非とするの論有り。卽位に暨んで、其の風を一變す。其の「與越公書」・「建東都詔」・「冬至受朝詩」及び「擬飲馬長城窟」、並びに雅體存し、典制に歸す。意は驕淫に在りと雖も、詞に浮蕩無し。

高祖の時代に「發號施令して、咸く浮華を去」つたというのは、さきに見た李諤の上書を契機とするものであり、煬帝がその文風（庾信體）を一變させたというのもすでに觸れた『隋書』柳彞傳に見える。

中國史上稀にみる暴虐の君主と言われた煬帝も、ここでは文學に關して、絶大なる贊辭を與えられている。ちなみに、道坂昭廣氏の指摘によれば、ここに擧げられた煬帝の作品のうち二首の詩は、いづれも南朝では顧みられることのなかつた五經の言葉を典據に用いており、古典的で節度ある美しさを持つ、政治性を備えた皇帝詩であるといふことである。⁽¹²⁾だとすれば、儒教的文學觀に立つ魏徵が彼の詩を高く評價するのは、蓋し當然すぎるほど當然のことであらう。

以上を通覽するに、後序に展開する文學史觀は、今日のわれわれの目から見るかぎり、非常にオーソドックスな「純」文學的なものであると言つてさしつかえないと思われる。この面において、盧照鄰や駱賓王のそれと通じる

部分がある。たしかに、『隋書』經籍志總序の末尾では「……文章は乃ち政化の黼黻」といい、さらに「治の具爲り」と明言しており、したがってこの後序は、一應文學教化説を前提としてはいるであろう。しかしここには、前章で見てきた一部の文學論にあらわれた強烈な儒教イデオロギーの影は極めて希薄であり、各時代の文學を冷靜に評價判断していこうとする態度がありありと見えるのである。

しかしながら、やはり梁末以後に關する後序の文學史觀は、『隋書』文學傳序や『周書』王褒庾信傳論、『陳書』徐陵傳等と比較して見るかぎり明らかに不自然であり、事實の誤認があると言わざるを得ないのである。

六

私はこれまでの章において、梁末以後の文學狀況と、初唐期に行なわれた文學評論および『隋書』經籍志集部後序それ自身を比較検討することによって、後序の内容、すなわち簡文帝に始まる宮體詩が男女の事柄を主題とする文學であるという記述に關して、事實誤認があるのではないかと述べた。では、かかる認識がいったい何故に出たのであろうか。最後に、このことについて少しく考えてみたい。

思うにそれは、『玉臺新詠』の存在が、かの『文選』との對照において頓にクローズアップされてきたことに關係しているのではないだろうか。

周知のとおり『玉臺新詠』は、後漢から梁代にいたる艶詩のアンソロジーであり、その撰者は梁・陳二代を通じて文壇の中樞的存在であった徐陵である。しかしながら小稿の冒頭にも指摘したように、この書の存在は『陳書』

『隋書』經籍志集部後序の宮體詩觀（中筋）

『南史』中のいづれの本傳にも記されていない。このことは、明らかに、該書が少なくとも陳朝にいたるまで無名の選集であった可能性が高かったことを示している。『唐會要』卷三十六「修撰」の項には、高祖李淵の敕を奉じた時の給事中歐陽詢が、武徳七年（六二四）九月に『藝文類聚』を撰して上呈したとある。そしてその卷五十五には「玉臺新詠」が収載されているから、初唐のこの時期、既に『玉臺新詠』の存在が一般に知られていたことはまず間違いない。また『隋志』集部には「玉臺新詠」十卷 陳・徐陵撰」とあるから、後序の筆者にしても、經籍志の編纂にあたってこの書を閲覽していた可能性が十分にあるのである。

そしてこの書には、既に何之元の「梁典總論」にもみたように、艷詩作家として位置づけられている簡文帝の詩が七十六首収録されており、その數は父親の武帝四十一首を大きく引き離して、全書を通じて第一位である。

一方、隋末の曹憲に始まり、許淹・李善・公孫羅に引き繼がれた「文選舉」の流行によって、『文選』が擡頭してきたことも無視できない状況であろう。周知のように簡文帝の兄昭明太子蕭統の名を撰者に冠するこの書は、東周から梁にいたるまでの、収録作家數百三十餘、作品數八百におよぶ、三十卷からなる詞華集である。しかも、三十七にのぼる文體をカバーした総合的な詩文選集なのである。この『文選』は、科擧受験者の勉強のためのテキストとして珍重され、則天武后以後その確固たる地位を築きあげることになる。かの李善によって最初の文選注が上呈されたのは、高宗の顯慶三年（六五八）、すなわち『隋書』經籍志をふくむ『五代史志』の志部が完成上呈された高宗の顯慶元年（六五六）の二年後のことである。時代の目はまさに『文選』にむきつつあったのである。ちなみに、前章で見た後序に擧げられた文人たちは、ただ一人嚴助を除けば、いずれも『文選』に作品を収録されてい

る作家ばかりである。そして、潘岳・陸機・謝靈運・顏延之・謝朓・沈約等、後序が贊辭のかぎりを盡くす文人たちの作品数は、『文選』所收の作家の中でもひととき目立って多い。⁽¹⁴⁾このことは、はからずも後序の文學觀が『文選』編纂者のそれと、ほぼ完全に一致することを物語っている。

とまれ、かかる状況において、簡文帝下の有力文人によって編纂された『玉臺新詠』の存在は、いやがおうにも注目を受け、『文選』と比較されて兩者の對照性がはっきりと認識されたにちがいない。かたや、單に古今の名作を收集するにとどまらず、科擧對策においても大いに資する實用的な綜合的詩文選集であり、かたや、綺羅脂粉の語を連ねた遊戯的性格の強い艶詩の詩集である。⁽¹⁵⁾一方の撰者は昭明太子であり、他方はその弟の東宮文學集團の心的詩人で、かつ次代の陳朝において文壇の重鎮であった徐陵である。のみならず、『玉臺新詠』には東宮文學集團の首長たる簡文帝の作品が、羣をぬいて數多く収録されている。しかし、『玉臺新詠』成書から約百年を経た後序の筆者には、既に該書の編纂當初の評價がわからなくなっていたにちがいない。⁽¹⁶⁾そして、おそらく以上のような條件が重なり、梁末以後に流行した宮體詩とこの書、およびそこに作品を多數掲載された簡文帝を短絡的に結びつけることによって、後序は彼をその創始者と名指しして宮體詩艶詩説を表明するにいたったのではないだろうか。

(平成元年九月末日脱稿)

注

(1) 『梁書』庾肩吾傳に次のようにいう。「(肩吾) ……累遷中

錄事諮議參軍、太子率更令、中庶子。初、太宗在藩、雅

『隋書』經籍志集部後序の宮體詩觀(中筋)

好文章士、時肩吾與東海徐摛、吳郡陸杲、彭城劉遵、劉

孝儀、饒弟孝威、同被賞接。及居東宮、又開文德省、置

學士。肩吾子信、摛子陵、吳郡張長公、北地傳弘、東海

鮑至等充其選。齊永明中、文士王融、謝朓、沈約文章始用四聲、以爲新變。至是轉拘聲韻、彌尚麗靡、復險於往時。

(2) 拙稿「宮體詩と『玉臺新詠』——宮體詩艶詩説への疑問——」(『日本中國學會報』第四十一集 一九八九年) 参照。

(3) 湘東王蕭繹の宮體派文學への轉換については、清水凱夫氏「簡文帝蕭綱『與湘東王書』考」(『立命館文學』四三〇・四三一・四三二 一九八一年)中に詳しい指摘がある。

(4) 『隋書』魏澹傳に次のようにいう。「(澹) 還除太子舍人。廢太子勇深禮遇之、屢令注『庾信集』、復撰『笑苑』・『詞林集』、世稱其博物」。

(5) 『隋書』柳彥博傳に次のようにいう。「初、(晉) 王屬文、爲庾信體。及見彥博已後、文體遂變」。

(6) 『舊唐書』虞世南傳に次のようにいう。「(世南) 善屬文、常祖述徐陵、陵亦言世南得己之意」。

(7) 「羣書治要序」(『全唐文』卷一百四十一)に次のようにいう。「近古皇王、時有撰述。茲皆包括天地、牢籠羣有。競採浮艷之詞、爭馳迂誕之説。聘末學之傳聞、飾雕蟲之小技、流蕩忘反」。ここにいう「皇王」は、直接には簡文帝蕭綱をさすと思われる。

(8) 四傑の文學論については古川末喜氏「初唐四傑の文學思想」(『中國文學論集』八 九州大學中國文學會 一九七九年)を参照。

(9) この庾中丞はあるいは庾信のことか。『周書』庾信傳によれば、彼は梁・元帝即位の直前に御史中丞に除せられており、北周においても、南朝の御史臺の官に相當する司憲中大夫に任ぜられている。假に庾信だとすれば、この部分は彼の南朝についてのコメントとも考えられる。しかしこれが北朝時のことであるとすれば、ここにいう「南國」は、單に北方出身の盧思道に對して、南方出身というぐらいの意味であらうか。いずれにせよ、庾信であるとすれば盧照鄰は彼の文學を評價していることになる。

(10) この他に徐・庾に言及するものとして、四傑よりも後の盧藏用が「陳伯玉文集序」中で、「宋、齊已來、蓋樵悴逶迤、陸頽流靡。至於徐・庾、天之將喪斯文也」という。「北齊書」文苑傳冒頭に次のようにいう。「夫玄象著明、以察時變、天文也。聖達立言、化成天下、人文也」。また『晉書』文苑傳序には「夫文以化成、惟聖之高義」といい、『南史』文學傳序では「易云觀乎人文化成天下」と『易』を引用している。

(12) 道坂昭廣氏「隋の煬帝について——その詩に關する一考察——」(『中國文學報』三十七 中國文學會一九八六年)を参照。

(13) 文選學の流行については「舊唐書」儒學傳に次のようにいう。「曹憲：所撰『文選音義』、甚爲當時所重。初江淮間爲文選學者、本之於憲。又有許淹・李善・公孫羅復相繼以『文選』教授。由是其學大興於代。また『新唐書』文藝傳に「(李善)：爲『文選注』、……居汴鄭開講授、諸生四遠至、傳其業、號『文選學』」といふ。

(14) 參考までに、この六人の『文選』收録作品數を擧げておく。

- ・潘岳：賦八 詩六 誄四 哀一
- ・陸機：賦二 詩三五 表一 序一 頌一 論二 連珠一 弔文一
- ・謝靈運：詩三二
- ・顏延之：賦一 詩十六 序一 誄二 祭文一
- ・謝朓：詩二一 賸一 哀一
- ・沈約：詩十三 彈事一 論二 碑文一

(15) 「玉臺新詠序」に次のようにいふ。「雖復投壺玉女、爲歡盡於百曉、爭博齋姬、心賞窮於六箸。無怡神於暇景、惟屬意於新詩。庶得代彼萱蘇、微蠲愁疾」。ここでは後宮に住まう「麗人」が、いつしか帝の寵愛も疎遠になり、詩作によつてその憂いを紛らそうとすることを述べている。「萱蘇」は「わすれぐさ」のこと。序文によれば、『玉臺新詠』は、かかる消遣的營爲の産物である「麗人」の詩と、「往世名篇」「當今巧製」から「艷歌」ばかりを「撰録」して成ったということである。そして序文の最後を「變彼諸姬、聊同棄日。猗歎彤管、無或譏焉」と締め括る。このようなことから、『玉臺新詠』の遊戯的性格は明白である。

(16) 『玉臺新詠』の成書時期については、從來中唐の劉肅撰『大唐新語』卷三公直篇により簡文帝の晩年とされてきたが、興膳宏氏「『玉臺新詠』成立考」(『東方學』六十三)の考證によれば、蕭綱立太子より三年後の中大通六年(五三四)頃とのことである。今、興膳説に従う。